

味の素食の文化センター研究成果概要報告書

<2020 年度研究助成>

武家儀礼の地域性

16 世紀から 17 世紀を中心に

東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程 湯沢丈

2023 年 6 月 30 日

<2020 年度研究助成>

武家儀礼の地域性 16 世紀から 17 世紀を中心に

湯沢 丈

(東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程)

1. 目的

1.1. 概要

本研究の目的は、戦国時代の武家儀礼における地域性を明らかにし、江戸時代への変遷の過程を、考古資料を用いて解明することである。

まず確認すべきは、本膳料理である。本膳料理は、銘々に本膳・二の膳・三の膳……と膳が出される料理の形式であり、古代の大饗料理とは異なる。本膳料理は室町時代に武家の儀礼膳として成立し、中世から近世の武家で重用され、近代まで日本の正式な料理の形式として存続したとされる(熊倉 1998・2007)。この本膳料理が供されたであろう武家儀礼の一端を明らかにするのが本研究の目的である。

1.2. 問題の所在

戦国時代、各地の武家勢力は自らの正統性を示すため、京都の文化を受容し、儀礼も京都・室町將軍を指向したとされる。そのために守護や新興勢力が室町幕府・將軍を希求し、政権・將軍は存続したと評価されてきた(二木 1985)。しかし近年、戦国時代の遺跡からは、京都中心モデルでは説明しきれない多様な状況が発見されてきている(中世学研究会 2018)。戦国大名居館における共通性の把握や類型化が試みられているが(東国中世考古学研究会 2016、小野 2017)、その後の江戸時代への変化について具体的な研究は殆ど見られない。

一方、江戸時代には、江戸城・將軍を頂点とする武家儀礼の体系が成立したとされる。儀礼によって近世武家政権は維持されたと評価されている(大友 1999)。かつて筆者は、江戸藩邸出土の饗宴で用いたと推定されてきた磁器の食膳具の出土事例を集成した。その結果、このような磁器群(後述「分類 A1」)が 17 世紀第 2 四半期から 19 世紀第 2 四半期までに確認され、その器種組成が類似することを明らかにし、これらは大名が 17 世紀半ば以

降、江戸時代を通じて必要とした道具であり、藩邸における饗宴の器の中心的存在であったと考察した(湯沢 2018・2019)。しかし 17 世紀前半については、資料的制約から武家儀礼の地域性に関する具体的研究は少なく、大略的研究に止まっている。また御成におけるカワラケを用いた武家儀礼の研究は約 20 年前の研究を最後に進展が見られない。更に武家儀礼に限らず、先行研究の課題は、時代ごとの言及に止まっている点である。

以上を踏まえ、武家儀礼における、戦国時代の地域性と、江戸時代の様相への収斂の過程を考古学的視点から検証・解明するのが本研究の目的である。

また武家儀礼の中で、最も象徴的な事例として御成おなりに注目する。

2. 分析

本研究では考古資料と文献史料の分析を行った上で、両者の比較を行った。以下、概観する。

2.1. 考古資料の分析

いずれも、資料を実見、肉眼観察し、法量・数量的把握を試みた。

2.1.1. 戦国時代

○対象

小田原城・城下町跡(武蔵)、八王子城跡(武蔵)、小田原城・城下町跡(相模)、一乗谷朝倉氏遺跡(越前)、平安京跡(山城)、勝瑞しょうずい遺跡(阿波)、大内氏館跡(周防山口)、大友氏館跡(豊後府内)。

○結果

各地の戦国大名居館・城郭・城下町跡では、在地系のカワラケ(ロクロ成形)と所謂京都系カワラケ(手づくね成形)が確認できた。以下、略記する。年代表記は、各地の編年研究を用いた。

なおカワラケは漢字で「土器」と記すが、材質を

表す語（土器・陶器・磁器）と区別するため、本報告では片仮名で表記する。

相模小田原 北条氏（山口 1991、諏訪間 1995、服部 1999）

- ・小田原Ⅱa 期中段階（16 世紀第 2 四半期）に京都系カワラケが出現。
- ・京のカワラケとは、厚さ・製法で異なる。
- ・Ⅲ期（16 世紀末）北条氏滅亡以後に生産が途絶える。
- ・分布は小田原城内や支城にほぼ限定。

周防山口 大内氏（古賀 1999、北島 2010）

- ・大内Ⅲ期（大内Ⅲ式、15 世紀中頃～末）在地のロクロカワラケの器壁が薄くなり、それまでの大小 2 法量から多法量化。
- ・Ⅳa 期（≒ⅣA 式、16C 前半）京都系カワラケ（手づくね）が出現。製作技術、法量も極めて類似。
- ・分布は大内氏の居館内にほぼ限定。

豊後府内 大友氏（塩地 1999、坂本 2005、長 2011）

- ・16 世紀前半に京都系カワラケ出現。法量分化。
- ・16 世紀後半になると器壁が厚くなる。
- ・大友氏館跡・府内町遺跡で大量に出土。
- ・17 世紀（江戸時代）になってもデフォルメしたカワラケが存続。

阿波勝瑞 細川氏のち三好氏（重見 1999）

- ・16 世紀前半には京都系カワラケが出現。3 法量。
- ・16 世紀前半は京都のカワラケに比較的類似するが、16 世紀後半になると胎土や調整等が変化。
- ・阿波の複数の遺跡で京都系カワラケが見られるものの、出土量は勝瑞地域が格段に多い。

越前一乗谷 朝倉氏（阿部 2009）

- ・16 世紀には京都系カワラケが出現。多法量。製作技法は京都と類似。

以上のように、京都系カワラケは、15 世紀末から 16 世紀までのある段階で移入され、当時は京都土器を模倣しているが、その模倣の程度は様々であり、各地で独自の変形を遂げる。例えば、周防山口では一見、京で生産されたカワラケと見間違える程に、京のカワラケを模倣しているものがある。その一方、小田原では内外面の調整を強調して段

を有する等デフォルメされている。

これら先行研究で指摘されていた独自性と変遷を確認できた（中井 2011・2022）。なお一部の地域では、手づくね成形の土器が、17 世紀以降も継続する実態を把握できた（豊後府内）。

法量・数量については、土器の性格上、短期間の調査では不可能であり、報告書掲載のデータを用いた。

2.1.2. 江戸時代

○対象

江戸の大名屋敷跡：有楽町一丁目遺跡・神田淡路町二丁目遺跡・和泉^{はかた}伯太藩上屋敷遺跡・東京大学本郷構内遺跡（武蔵）。

金沢城跡・城下町跡：広坂遺跡・下本多町遺跡（加賀）。

○結果

・土器

管見の限り唯一、江戸時代の御成で使用・廃棄されたと目されている東京大学本郷構内遺跡病院地点「池」遺構出土の土器と木製品を実見・計測した。詳細は拙稿（湯沢 2022）を参照されたい。

本資料は、寛永 6 年（1629）4 月 26・29 日に將軍家光・大御所秀忠が前田家（金沢藩）邸へ御成した際に使用され廃棄されたと目されている（藤本 1990、堀内 2000）。先行研究では、使用場面について複数の可能性が提示されたが、なかなか絞られていなかった。

筆者は資料を実見・計測し、また詳細な御成記を翻刻・分析し、考古資料と御成記を比較した。

その結果、表 3 の通り、將軍・大御所達の献立で使用された土器には「金」等と記載されていたが、「池」出土遺物の内で金が付着したものはごく僅かであった。また出土した膳は足打折敷であり、將軍達が式三献や七五三膳で使用したとされる膳（供饗・三方）に比べて格下であることが明らかとなった。

因みに史料上に献立が記されるのは、將軍と御相伴に加えて、元和度史料上では「御供之衆」500 人前、「御歩之衆」300 人前、「御中間衆」200 人前が記載される。「御供之衆」以下の献立を記された者達を、本報告では「御供」と呼ぶ。それ以外にも、献立不記載の者達、具体的には、より下位の直臣や、御相伴・御供の家来、すなわち將軍にとって陪

味の素食の文化センター研究成果報告書

表 1 抽出資料の器種・法量組成（分類・年代順）

分類	年代	遺跡略称	遺構	法量換算										法量 不換算 合計	計 数 基 準	出土地	詳細
				坏・碗・ 猪口	三寸	五寸	七寸	八九寸	尺	粗製品	飯碗・ 喫茶碗	合計					
A1	17C2q	尾張1	55-5J-5	5	4	18	7	0	2	-	-	36	37	i	御家人か	「松平大隅与力同心」	
A1	17C3q	淡路町二丁目	C区4面焼土	1	8	16	1	0	4	-	-	30	32	i	大名	永井(淀藩)	
A1	17C3q	有楽町一丁目	070号	104	96	207	84	3	10	-	-	504	542	i	大名	藤井松平(明石藩)	
A1	17C4q	尾張7	149-3N-5	15	23	31	21	2	2	-	-	94	97	i	大名	尾張徳川(名古屋藩)	
A1	17C4q	東大病院	L32-1	109	56	285	97	1	5	-	-	553	576	iii	大名	前田(大聖寺藩)	
A1	18C4q	沙留2	5I-032	4	7	16	9	5	1	1	-	43	43	i	大名	伊達(仙台藩)	
A1	19C2q	沙留1	6I-060	13	11	6	7	1	39	0	1	78	78	iii	大名	伊達(仙台藩)	
A1	19C2q	沙留3	4J-151	30	42	21	17	2	16	0	2	130	133	iii	大名	伊達(仙台藩)	
A1	19C2q	沙留4	6H-073	21	11	22	19	0	1	0	0	74	80	iii	大名	伊達(仙台藩)	
A2	18C1q	東大御殿	537号	11	0	43	2	0	0	1	-	57	57	iii	大名	前田(金沢藩)	
A2	18C1q	沙留2	6I-521	37	32	47	15	1	0	0	-	132	135	i	大名	伊達(仙台藩)	
A3	19C2q	沙留4	5H-393	15	5	17	6	2	11	3	0	59	61	iii	大名	伊達(仙台藩)	
B	18C3q	日本橋一丁目	416号	93	45	45	7	6	1	31	-	228	278	iii	商人	問屋集中の商業地	
B	18C4q	蛸殻町一丁目	125号	17	18	21	2	2	0	13	-	73	75	iii	大名	本多(山崎藩)	
B	19C1q	隼町	558号	12	22	5	2	1	1	5	1	49	50	ii	大名	京極(豊岡藩)	
B	19C2q	宇和島	BSK10	15	8	10	9	5	4	6	4	61	65	iii	大名	伊達(宇和島藩)	
C	19C2q	内藤町3	1号	708	118	26	55	-	70	-	652	1629	1847	ii	旗本・御家人	町人へ貸借の可能性	
C	19C2q	和泉伯太	1号	11	12	7	8	2	3	2	17	62	69	iii	大名	渡辺(伯太藩)	

注：実見によって旧稿（2019）の情報を一部改めた（淡路町二丁目 C 区 4 面焼土、有楽町一丁目 070 号、和泉伯太 1 号）。

「法量換算」は口径が推定できるもののみ集計し、「法量不換算」は口縁部のない資料等も含めて集計した。

各項目（器種・法量）が各一括資料の合計に占める割合を灰色の帯で示した。

「粗製品」と「飯碗・喫茶碗」は、その分類が存在しない年代の一括資料ではハイフンを記入した。

「計数基準」は、i：実見・計測した数量、ii：報文記載の数量、iii：実見の上で報文記載の数量である。

臣も随行した可能性が想定できる。彼等を、本報告では「随行者」と呼ぶ。

そのため「池」出土の膳・カワラケは、將軍の御供や随行者が使用した可能性が高い。とはいえ、これらの遺物が寛永度の御成で用いられたことは間違いないだろう。

また製作技法・形態的特徴の比較と、蛍光 X 線分析の結果、「池」出土の手づくねカワラケには、前田家の国元である金沢で生産されたカワラケが複数含まれる可能性が高い（西本・丸山他 2020）。江戸・周辺で生産されたとされる「江戸式」カワラケは、17 世紀初頭に出現し、中葉から出土量が増加する（梶原 2019）。これらの状況から、17 世紀前半まで他の藩邸への御成で使用されたカワラケは多様であったことも想定できる。今後の課題としたい。

・磁器

江戸遺跡については、既に旧稿（湯沢 2018・2019）で取り上げたが実見できていなかった資料を重点的に調査した。報告書によっては「揃い」ごとに破片の写真が掲載されていた。因みに揃いととは、

器種・法量・文様共に同一または類似した遺物群を指す。報告書上で確認した個体数と、実見して計量した結果が大きく異なるものが複数確認された。これは遺物の掲載方法や個体数の算出方法が報告書・研究者によって異なるためであり、筆者の分析手法における資料実見の重要性を改めて確認できた。

集計方法は以下の通りである。すなわち、磁器の食膳具を対象とし、坏・碗・猪口類と皿・鉢類に分け、後者を法量毎に次のように分類した。すなわち、「三寸」（口径が 12cm 未満）、「五寸」（口径が 12cm 以上、18cm 未満）、「七寸」（口径が 18cm 以上、24cm 未満）、「八九寸」（口径が 24cm 以上、30cm 未満）、「尺」（口径が 30cm 以上）である。

この分類は鍋島家（佐賀藩）が將軍に献上した器の規格を参考にした（大橋 2007、山本 2012）。この内、献上されたのは「坏・碗・猪口」と、皿・鉢類では「三寸」「五寸」「七寸」「尺」である。

表 1 は集計結果である。粗製品等の武家儀礼との関連が少ないと想定される器種を含まず、上述の鍋島家献上の器種を全て含む分類 A1 を中心に言及する。その平均は次の通り（表 2）。すなわち

表2 分類A1の平均

	坏・碗・猪口	三寸	五寸	七寸	八九寸	尺	合計
個体数	37.3	31.4	75.8	31.6	1.1	9.9	187.0個
比率	20	17	40	17	1	5	100%

五寸が40%、坏・碗・猪口が20%、三寸と七寸がともに17%、尺が5%、八九寸が1%である。この比率は旧稿から数%修正することができた。

また金沢の下本多町遺跡SK11(宝暦9年(1759)火災で被災・廃棄)でも概ね類似した傾向が確認できたが、各地の資料を集成し比較することを今後の課題としたい。

2.2. 文献史料の分析

道具を儀礼の場でどのように使用したのか、また儀礼の次第については、考古資料のみで復元するには限界がある。そのため文献史料から当時の儀礼の行為・次第を復元・推定する。

式三献^{しきさんけん}について、先行研究を参考にして、御成記や作法書の記載を確認した(二木 1999、中井 2011)。式三献また略式の三ツ盃^{みつさかずき}は、武家・寺家の内部、また領主である武家と領民の間でも行われる行為であった。

その所作については先行研究・史料によって、細部は異なるものの、次のような内容である。

身分・格式による規定・区別は、献・膳の数、順序、席、道具等に表れる。また謁見時の距離・人数、行為にも両者の関係性(主従関係や同席者間の優劣)が表れる。

・対象

『群書類従』『続群書類従』所収の御成記・作法書。その他、御成記・戦国法・年中行事記録等(加賀前田邸の御成記。(大友)当家年中作法日記。色部氏年中行事。長楽寺永禄日記)。

2.2.1. 戦国時代

上記御成記を確認したところ、記録の精粗の差はあるものの、御成の次第に大きな差異は認められなかった。小野正敏の研究を参考に、飲食に関する次第を抽出すると、寝殿・主殿における式三献などの盃事、会所・広間における饗宴である(小野 1994・1997)。食文化史では、前者を「酒礼」と

称し、後者は食事中心の「饗膳」と、宴会の「酒宴」に分けて呼ぶ(熊倉 1998・2007)。この3部構成が基本であり、茶は客(御成では將軍)が所望した場合等、状況に応じて提供された。因みに茶は別室で点てて客前に運ぶ、あるいは客と同室であっても仕切られた場所で点^たてたのである。これらは禅宗寺院に伝わる、抹茶を入れた碗を客席に運び、給仕者が湯瓶で熱湯を注いで茶筴で茶を点てるのとは異なる(二木 1999:144、橋本 2018:108-111)。

また作法書・年中行事記録については、年始行事における類似性が確認できた。なお江戸時代の史料との比較を行うことで、時代的特徴を明らかにしたい。今後の課題とする。

2.2.2. 江戸時代の御成記

これまで、佐藤豊三の研究によって將軍家御成の変遷が明らかにされ、また藤川昌樹の指図と次第の検討によって御成の具体的経路等が明らかにされた(佐藤 1974-86、藤川 2001)。筆者は前田家(金沢藩)邸への元和3年(1617)と寛永6年(1629)に行われた御成記を翻刻・分析した(湯沢 2022)。詳細は拙稿を参照されたいが、各御成記の構成は表3の通りである。元和度と寛永度の次第は概ね同じであったため、不記載の部分を補いながら御成の全体像を復元した。その結果、次のようなモデルが想定できる。すなわち御数寄屋の膳では白木の膳に陶磁器・漆器を載せ、書院での式三献と七五三膳では白木の膳に金を塗った土器(カワラケ)を用いよう。また引替膳の道具は不記載のため不明である。

3. 分析結果と考察

各分析結果を整理し、武家儀礼の行為の内、飲食を中心に、次第・道具・場所をモデル化したのが表4である。

各時代に共通するのは、御成の次第、道具の種類、人に応じた差別であり、共に將軍を指向していた。しかし、カワラケ等の道具の詳細は異なっ

味の素食の文化センター研究成果報告書

表3 前田邸御成記の内容 (湯沢 2022 より作成)

元和3年(1617)5月13日
将軍秀忠(辰口邸)

場所	数寄屋	書院	広間	書院	同所	広間
行為	膳部 茶	式三献 献上 下賜	献上 観能	七五三膳 献上	引替膳	観能
献立	本膳、 二、引 物、菓子	初献、二 献、三献	-	本膳、二 之膳、三 之膳、菓子	本膳、二 之膳、吸 物、押 物、菓子	-
膳	白木	白木	-	白木	×	-
器	×	土器(金)	-	土器(金)	×	-

×：不記載

寛永6年(1629)4月26・29日
将軍家光・大御所秀忠御成(本郷邸)

場所	数寄屋	黒書院	「書院」 (白木之書 院カ)	広間
行為	膳部 茶	式三献 下賜	七五三膳 (引替 膳?) 献上	献上 観能
献立	(本)、 二、引 物、吸 物、肴、 菓子	×	×	-
膳	×	-	-	-
器	陶磁器・ 漆器	-	-	-

ていたのである。

一方で江戸時代になってからの変化は、第1に次第である。すなわち茶事(膳と茶)が正式な次第に組み込まれる。これは先行研究で既に指摘されている(佐藤 1974-86)。第2に場所については、戦国時代は酒礼と饗膳・酒宴で場所を移ったのに対し、江戸時代になると全て「書院」で行われるようになる。饗膳と酒宴の「書院」が同じ場所かどうかは、御成によって異なりそうだが、これについては稿を改めたい。第3に膳と食器は、戦国時代は白木膳とカワラケを用いるが、江戸時代では引替膳で磁器と漆器を用いるようになるだろう。これは主に天和2年(1682)朝鮮通信使饗応記録から推定した(島崎・山下 1989-91、堀内・島崎 2013、湯沢 2018・2019)。

先述の通り、江戸遺跡では分類A1とした磁器群が17世紀第2四半期を初現として、第3四半期から複数確認されるため、これまで筆者は、このような江戸時代的な武家儀礼のスタイルが17世紀

半ばには確立し、第3四半期に広まったと旧稿で述べた。

今回、元和・寛永の分析を通じて、江戸時代的な様子が見て取れたため、この儀礼スタイルが、この頃には成立していた可能性も考えられる。事例を集成し、比較することで実態を明らかにしたい。今後の課題とする。

なお5代将軍綱吉の御成では、茶事が行われなくなる(佐藤 1974-86)。綱吉期の御成については、稿を改めたい。

4. 成果

戦国時代は、各地の戦国大名居館跡出土遺物を実見し、複数の御成記を分析した結果、御成次第の共通性と、道具の地域差を確認することができた。

江戸時代では、寛永6年前田邸御成記と、同御成で使用・廃棄されたと目されるカワラケ・木製品を比較した結果、御成の詳細な復元が可能とな

表4 武家儀礼のモデル (御成・飲食)

行為	戦国時代		江戸時代	
	道具	場所	道具	場所
酒礼	白木膳・カワラケ	寝殿・主殿	式三献：白木膳・カワラケ	書院
饗膳・酒宴	白木膳・カワラケ	会所・広間	七五三膳：白木膳・カワラケ 引替膳：磁器・漆器	書院
茶	※正式な次第には無い		膳部：白木膳・陶磁器・漆器 茶：種々の道具	数寄屋
指向	京都・室町将軍		江戸・徳川将軍	

注：江戸時代の御成では、広間は献上と観能で使用。

り、出土遺物の使用場面を相当絞ることができた。これによって、江戸時代的な武家儀礼スタイルの成立が寛永期（1624～44 頃）に遡る可能性を指摘したが、今後の課題としたい。

最後に、本研究の主題である地域性について整理する。16 世紀・戦国時代に見られた道具、特にカワラケの地域差が、17 世紀前半の江戸まで残っていたことが確認された。一方で、史料上の制約があるものの、時代ごとの行為・次第に大きな差は認められなかった。つまり、江戸時代的な武家儀礼スタイルが成立してもなお、戦国時代的な道具の差異が存続していたのである。

5. 課題

まず、資料的制約から今回取り上げられなかった 16 世紀末から 17 世紀初頭の様相の解明が課題である。次に、江戸時代の国元と江戸藩邸との比較を行うことによって、国元でも江戸・徳川将軍を指向した儀礼が行われていたのかを解明することも課題である。

謝辞

本研究は味の素食の文化センターの助成を受けた。助成のおかげで各地に調査へ赴くことができた。心より御礼申し上げます。

共同研究者の内田昌太郎氏（筑波大学大学院 人間総合科学研究科 博士後期課程）には、各調査において多大な協力を得た。内田氏からは御成における茶道具に関する報告をいただいたが、紙幅の都合で割愛する。新田和央氏には京都系カワラケについて、都築由理子氏には木製品について御教示いただいた。考古資料調査にあっては山田大貴・岩浪雛子・蓑輪晶子の各氏の協力を得た。

また調査にあたり、各担当者・機関の協力を得た。感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。相場峻、石川美咲、岩城晴美、大立目一、川越光洋、北島大輔、佐々木健策、塩地潤一、重見高博、庄田知充、滝川重徳、多田明加、土谷崇夫、野尻夏姫、増野晋次、松浦憲治、村山修、山本雅和、吉田寛
藍住町教育委員会、石川県金沢城調査研究所、大分県教育委員会、大分市教育委員会、小田原市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、京都市埋蔵文化財研究所、千代田区教育委員会、八王子市教育委員会、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館、

山口市教育委員会

参考文献

- 阿部来（2009）「土器皿からみた中世後期の越前」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要』2008：24-37
- 大友一雄（1999）『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館
- 大橋康二（2007）『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣
- 小野正敏（1994）『戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識』『信濃』46（3）：228-254
- 小野正敏（1997）『戦国城下町の考古学：一乗谷からのメッセージ』（講談社選書メチエ 108）講談社
- 小野正敏（2017）「発掘された建物遺構をどのように読み解くか：中世住宅発掘遺構の研究方法をめぐって」『遺跡に読む中世史』（考古学の中世史研究 13）：5-47、高志書院
- 梶原勝（2019）「カワラケ」『江戸の土器 付・江戸遺跡発掘調査報告書一覧』（考古調査ハンドブック 19）：20-31、ニューサイエンス社
- 北島大輔（2010）「大内式の設定：中世山口における遺物編年の細分と再編」『大内氏館跡 11』（山口市埋蔵文化財調査報告 101）：175-258、山口市教育委員会
- 熊倉功夫（1998）「日本料理における献立の系譜」『日本料理の発展』（全集日本の食文化 7）：15-40、雄山閣出版、初出：石毛直道編 1985『論集東アジアの食事文化』平凡社
- 熊倉功夫（2007）『日本料理の歴史』（歴史文化ライブラリー 245）吉川弘文館
- 古賀信幸（1999）「中国地方の京都系土師器皿：戦国期の資料を中心として」『中近世土器の基礎研究』14：103-121
- 坂本嘉弘（2005）「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」『豊後府内 1 中世大友府内町跡第 5 次・第 8 次調査区：大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 1）：8-12、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 佐藤豊三（1974・86）「将軍家「御成」について（1）・（9）」『金鯨叢書：史学美術史論文』1・2・3・4・6・7・8・11・13
- 塩地潤一（1999）「九州出土の京都系土師器皿」『中近世土器の基礎研究』14：123-137
- 重見高博（1999）「守護町勝瑞出土の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』14：93-101

味の素食の文化センター研究成果報告書

- 島崎とみ子・山下光雄（1989-91）「東海道三十三次饗応の旅」『月刊専門料理』24-26、25（2）を除く 24（6）～26（6）全 24 連載
- 諏訪間順（1995）「小田原城の考古学的調査」『城郭』（小田原市史 別編）：198-233、小田原市
- 中世学研究会（編）（2018）『幻想の京都モデル』（中世学研究 1）高志書院
- 長直信（2011）「豊後府内における京都系土師器導入前後の土器様相：大友館跡の形成過程解明へ向けて（その1）」『古文化談叢』65（分冊4）：269-294
- 東国中世考古学研究会（編）（2016）『発掘調査成果でみる16世紀大名居館の諸相：シンポジウム報告書』東国中世考古学研究会
- 中井淳史（2011）『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
- 中井淳史（2022）『中世かわらけ物語：もっとも身近な日用品の考古学』（歴史文化ライブラリー 540）吉川弘文館
- 西本右子・丸山毅真・長佐古真也・堀内秀樹・小林照子（2020）「東京大学本郷構内遺跡出土「白色系手づくねかわらけ」の研究」『東京大学本郷構内の遺跡医学部教育研究棟地点研究編』（東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14）：231-272、東京大学埋蔵文化財調査室
- 橋本素子（2018）『中世の喫茶文化：儀礼の茶から「茶の湯」へ』（歴史文化ライブラリー 461）吉川弘文館
- 服部実喜（1999）「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究』14：37-64
- 藤川昌樹（2001）「寛永7年島津邸御成における御殿の構成と式次第」『日本建築学会計画系論文集』539：255-261
- 藤本強（1990）『埋もれた江戸：東大の地下の大名屋敷』平凡社
- 二木謙一（1985）『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館
- 二木謙一（1999）『中世武家の作法』（日本歴史叢書 58）吉川弘文館
- 堀内秀樹（2000）「史料から見た御成と池遺構出土資料」『加賀殿再訪：東京大学本郷キャンパスの遺跡』（東京大学コレクション 10）：138-147、東京大学総合研究博物館
- 堀内秀樹・島崎とみ子（2013）「朝鮮通信使饗応と器」『徳川将軍家の器：江戸城跡の最新の発掘成果を美術品とともに：千代田区立日比谷図書文化館平成24年度文化財特別展』：137-144、日比谷図書文化館・千代田区教育委員会
- 山口剛志（1991）「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27：115-126
- 山本文子（2012）「全国の遺跡から出土した鍋島焼にみる献上と贈遺」『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津：精巧なるやきもの』：204-218、佐賀県立九州陶磁文化館
- 湯沢丈（2018）「江戸藩邸出土の儀礼道具：揃いの磁器の使用モデルを中心に」『東京大学考古学研究室研究紀要』31：85-121
- 湯沢丈（2019）「江戸藩邸出土の武家儀礼道具と文献史料との比較」『江戸遺跡研究』6：39-56
- 湯沢丈（2022）「前田邸御成記の分析：元和・寛永」『東京大学構内遺跡調査研究年報』15：107-184